

## アジア太平洋数理・融合研究戦略検討会（第5回）議事概要

1. 日時 令和3年6月10日（月）13:00～15:00
2. 場所 オンライン開催
3. 出席者（敬称略）  
（委員）  
岡本久主査、椿広計主査代理、稲葉寿委員、江村克己委員、  
グレーヴァ香子委員、國府寛司委員、小谷元子委員、中村天江委員  
（文部科学省）  
杉野研究振興局長、渡邊基礎研究振興課長、高橋融合領域研究推進官
4. 議題
  1. 報告書（最終案）について
  2. 全体討議
  3. その他
5. 議事概要
  - (1) 議題1について、以下の通り説明及び質疑応答が行われた。
    - ・事務局より、資料3及び4に基づき、報告書最終案について説明があった。
  - (2) 議題2について、主に以下のような質疑応答及び意見交換が行われた。
    - いわゆる文理を分断するのではなく、文理横断的な試みをするべき。数理科学は社会科学を含む全てのサイエンスの基本。融合的な活動を重視するべき。
    - 産業界や人文・社会科学など数理コミュニティ以外の方々に向けて、この報告書をいかに訴求するのか、別の資料を用意するのも一つのやり方。
    - 気になるのが、多様なキャリアパスにおける研究評価。難しい議論だとは思いますが、論文数等の伝統的な学術的指標や社会的インパクトなどアカデミー志向だけではなく数学、数理科学をやってポジションを得ようとするときには、色々な評価軸があって当然。アカデミーでは論文数が減っていることでのプレッシャーもあり、どういう研究評価としていくのかが今後の課題。

（出会いと議論の場としてのフォーラムを設立するという部分について）

  - 交流の場を設けるハブは、若手や企業も含めた出来る限り幅広い交流の場ができれば大変素晴らしい。
  - 社会的課題解決や産業界との連携に向けた取組は、ボトムアップというよ

りも、(むしろ) プランニングや企画機能について早晩に議論を行うことが必要。

- このような枠組みが本当に生きるためには、広い意味での数理科学コミュニティの努力が大切であり、産業界からの理解も得て、(産業界と) 協働体制で取り組んでいかなければいけない。
  - このような取組に対して、産業界の期待はあり理解している人もいるが、理解が十分浸透していないということが一つの課題。また、出会いの場と言葉にするのは簡単だが、実際に場を創ることは結構難しい。機運を高めながら良い形を探っていくしかない。今回の話を契機に、まずは(「場」を) 立ち上げることが重要。その際には、閉じたコミュニティによるものにならないようにすることが最も重要。
  - 優秀な研究者が育つ素地として、初期キャリアと(いわゆる)「正統的周辺参加」が重要。こういう場で経験をする中で、研究者が興味をみつけ人脈を作りよりプロフェッショナルになっていくという経験の機会を作ることが、研究力の底支えになる。
  - 場自体が機能するためには、何をキラーコンテンツにするかが非常に大事。産業界とアカデミアがお互いに手の組めるテーマをどう見つけるかということでもあり、分かりやすいインセンティブを様々な人たちに伝えるワーディングが生み出せるかということでもある。この場の推進においては、中身のほうに魂が込められるような検討体制、推進体制がつけられることを強く期待。
- (3) 主査より、報告書は主査と事務局に一任いただいた上で、委員に対しても最終確認することについて説明があり、承認された。また事務局より、科学技術・学術審議会基礎研究振興部会において公表される予定である旨の説明があり、閉会となった。

以 上